

地域ふれあい道德教育推進事業（教育を語る会）

南アルプス市立大明小学校
平成 21 年 11 月 14 日（土）
午後 1 時 30 分～ 4 時

☆分科会（**学力向上と家庭での生活習慣**）

基調提案（大明小学校長 名取 武師）

1 はじめに

小中学校における 9 年間の義務教育は、各学年の教育課程を通して、一人一人の子どもたちに、それぞれ小中学校の課程で身に付けるべき最低限の学力（教科の力のみならず、「生きる力」を含めた包括的な学力）を、確実に定着させることにあります。

そのために私たち学校や教師は、子どもや保護者に対し、各校の教育目標や指導方針を明確に示すとともに、各学年で身に付けるべき学力保障に対する責務をおっております。しかし、今日的大きな課題でもありますように、子どもの教育は、今や学校だけでは十分とは言えず、学校・家庭・地域社会との連携が強く叫ばれている現状です。

昔から子どもは、社会の宝とよく言われますが、ますます少子化進む中で、地域の子どもは地域で育てるといふ地域の役割、また、家庭においては、核家族化が 60% を占めると言われる中で、保護者や家庭の責任も問われております。

今私は、学校たよりを「子育てたより」というタイトルで校長室から発信しています。その「たより」の裏面で、陰山英男氏の「**学力は家庭で伸びる**」を紹介しています。これは、決して学力の向上や学力問題を家庭の責任に押しつけるためでも、家庭の問題であるという考えではありません。私自身の子育てや我が家の反省から、この著書に強く感動を覚え、教育に携わる者として大変好感と共感を覚えた経緯があったからです。

今日の分科会において、子どもたちの家庭での生活が、学力向上といかに関わっているのか、また、親としてのより良い子育てについて、話し合いが深まれば幸いです。

2 学力向上は、規則正しい日常の生活習慣から

「**早寝・早起き・朝ごはん**」このフレーズは、私たちの日常生活の中で聞きなれた言葉として定着しています。子供の育成にかかわる文部科学省の様々な推進事業や各種団体の青少年健全育成に関する活動においても、この言葉はスローガンのように扱われることが多くなっています。この言葉の源をたどれば、陰山先生が兵庫県山崎小学校教員時代の実践から生まれたものと言っても過言ではありません。

子どもたちの日々の生活がいかに規則正しく送られているのか、このことは、学校での子供の様子を見れば一目瞭然です。朝から元気がない、顔色が悪い、授業中の姿勢が悪かったり、授業に集中できなかつたり、いずれもこのどれかに当てはまるものです。

全国学力学習状況調査の結果からも、陰山先生の実践から指摘された同じようなことが浮き彫りになりました。たとえば、毎日朝食をきちんと食べている児童や普段から家族と夕食を一緒に食べている児童、また、毎日同じ時刻に寝たり、起きたり、規則正しい生活をしている児童の正答率は、高い傾向にあること。

逆を言えば、朝食を食べなかつたり、夜遅くまで起きていて朝起きるのが遅い児童ほど正答率が低い傾向にあったということです。また、1日当たり、3時間以上テレビを見たり、インターネットや携帯電話をしたりする子どもの正答率は、低い傾向が見られることなど、日常における生活習慣が乱れているか、規則正しく機能しているかにより、学力の定着ということに大きな因果関係があることが指摘されているのです。

3 陰山流・「学力は家庭で伸びる」とは？ 本の紹介（目次等）

陰山流を象徴するものは、何と言っても「百ます計算」です。理屈より実践を重視する陰山先生は、論を闘わす前に、まず「やってみる」という主義です。百ます計算も漢字の書き取りも、まず実践することから始めたのです。いわゆる昔から勉強の基本と言われる「読み書き計算」の徹底した反復学習です。これらの実践を通し子どもたちから驚くべき集中力と能力を引き出し、全国的に脚光を浴びることになったのです。

しかし、著書「学力は家庭で伸びる」の序文で、先生は次のようなことを言っています。今の子どもたちは、気力・体力共に低下しています。これは、**生命力そのものが低下**しているからなんですね。ところが、学力だけがクローズアップされ、問題にされています。

体験学習を増やそう、詰め込み教育をやめようという「ゆとり教育」については、まったくそのとおりだと思います。しかし、学校教育だけで「生きる力」をつけようという考え方が、そもそも無理な話で、本質を見落としています。**親も教師も、子どもの生命力の低下に、もっと目を向けるべきです。学力の根本は、生命力なんですから。**

このように、学力の根本は生命力だと主張される陰山先生は、学力向上の秘訣を家庭における生活習慣の改善にあると考え、この著書の中で食事内容や睡眠時間など、具体的な提言や実践例を紹介しています。もちろんこのことは、先生自らの実践と成果に基づくもので、学校(教師)と家庭の連携の中で培ってきた大変説得力のある内容です。学力を身に付けることとは何かを考えるため、教師にも保護者にも知っていただきたい内容です。

4 家庭でできる実践を（親は教師でもある）

私は、親の立場として自らの子育てを振り返った反省や陰山先生をはじめとする著名な教育者の様々な提言等から、3歳から10歳くらいまでにおける家庭での親の教育が極めて重要であると考えています。この8年から10年ぐらいの間に、親として、どのように子どもにかかわるべきなのか？手を抜いてはいけません。本当に手抜きは、後で必ず何らかの形で現れてくるものです。

家庭において親は、子どもに対して教師という立場にもなります。陰山先生が提言する生命力とは、「生きる力」と捉えてもよいと思います。子どもの生きる力を高めるため、家庭における環境改善に努めるのは、親の役目であると思います。学校においては、もちろん、われわれ教師の責務です。

まずは家庭でもできる簡単な実践や可能な取り組みを、一つ二つ始めてみてはいかがでしょうか。それには、親がどのような方法があるのか、学習することが必要になります。親が勉強しながら、もう一度子育てについて考えることが大切だと思われます。私の場合は、もうすでに手遅れなのです。ここにお集まりの保護者の皆様には、まだまだこれから勝負どころです。（参考例や子育て関連の推薦図書等は、別紙を参照）

5 おわりに

今、子どもには「生命力」が、また、家庭には「家庭力」が、そして、学校には「学校力」という、それぞれの「力」が求められています。本校では、「自ら考え、活動する心豊かな子ども」を育てることが、学校の教育目標になっております。この目標の具現化には、何事にも自分自身でよく考え、自分で適切に判断し、行動できる人間になること。そして、他を思いやれる心優しい人間に育ててほしいという願いがあります。このことは学校も家庭も、また、教師も保護者も皆共通の願いがあることと思われま

私たち教師は、一人一人の子どもたちを有名大学に入れるために教育するものではありません。勉強とは何か、また、勉強することとはどのようなことなのかを考え、自ら学ぼうとする子どもを育てたいのです。本当の勉強とは、孤独になることです。一人学びの上手な子どもに育て、その姿を傍らでそっと見守り、励ます親や教師でありたいものです。